

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 金 秀 姫

本論文は、嗅覚を中心に『源氏物語』における感覚表現の高度な達成を明らかにしたものである。論文の構成は、第Ⅰ部「嗅覚表現の文学史的展望」、第Ⅱ部「五感をめぐる『源氏物語』」の二部からなる。

第Ⅰ部第一章では、『万葉集』における嗅覚関連語彙の用例を検討し、「にほふ」が対象から発散するものを全感覚的に受容していることを表す語であるという説を支持するとともに、大伴家持の歌あたりから、純粋な視覚や嗅覚が特化された表現が見られることを指摘している。また、「香」「かぐはし」「かをる」といった語も、「にほふ」同様、本来対象の共感覚的な感受に関わる言葉であったが、「にほふ」と違って、人柄や精神性などをも含意する用例があることを指摘する。第二章では、『古今集』以下の三代集における嗅覚表現を検討し、『古今集』には、嗅覚特有の身体的・直接的な記憶の喚起力を詠んだ歌が見られることに注目し、しかもそうした表現が、その後の和歌よりもむしろ『源氏物語』に受け継がれて深化されている、として、第三章「『源氏物語』の芳香表現」につなげている。

すなわち、「香」「かをり」には人柄や精神性などをも含意する用例があるという第一章の分析結果を生かした「空蟬物語の『いとなつかしき人香』考」「匂ふ兵部卿・薫中将考」、そして、非在の対象にまつわる嗅覚特有の記憶喚起力を詠んだ古今集歌に注目した第二章と関わらせて、手習巻における浮舟の歌に、官能的な記憶を対象化していとおしむまでに成熟した浮舟の心の軌跡を見届ける「浮舟物語における嗅覚表現」など、第三章の諸論考はいずれも論者の犀利な分析力と、粘り強く明晰な論理構築力をうかがわせるものである。とくに、「浮舟物語における嗅覚表現」は、「袖ふれし人」が薫か匂宮かという解釈上の論争に、ほとんど決定的とも言える新見をも併せて提示しており、すでに学界でも高い評価を得ている。

また第Ⅱ部は、『源氏物語』における聴覚と視覚の表現にまで分析をおしひろげて、物語を織りなす言葉のあわいから、物語世界の実在感が立ち上がってくる機微をとらえようとしている。

第Ⅰ部第二章は、分析する和歌の対象を私家集にまで広げるべきであったし、また第Ⅱ部はなお今後に大きな課題を残すものと言わざるをえないのであるが、しかしながら、第Ⅰ部の論考の充実は、そうした不満をも補ってあまりあるものである。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。